

## 紅葉狩

附『戸隠山絵巻（とかくし山）』『いぶき山』『仁勢物語』『紅葉

狩（平のこれもち）』『新撰紅葉狩』『梶狩劍本地』『戸隠山

はなもちみじ

太平御劔』『花楓劍本地』『平維茂凱陣紅葉』『傾城水滸伝』

『紅葉狩吾嬬錦絵』

観世小次郎信光（永享七年（一四三五年）または宝徳二年（一四五〇年））〜永正一三年（一五一六年））作？。

鹿狩りに山に入った平維茂が紅葉狩の女に誘われて酒宴に加わるが、女は実は鬼神で、維茂はこれを退治する。謡曲の章句には「戸隠」の語句はないが、中入りに登場するアドアイがこれを戸隠山でのこととするのが通例。謡曲の本体ではないために、定まった語句はなく、流派によっても異なりはあるが、たとえばおおむね次のような内容である。

八幡やわたはちまんぐら八幡宮に仕える武内という末社の神が登場して次のような趣旨を述べる。

「余五（五）の將軍平の維茂は戸隠山に住む鬼神が民を悩まので、朝廷よりを平げろとの命を受けて信濃の国の戸隠山へ分け入る。大剛の者なので、鬼神の事を気にもしないで、山々の紅葉を眺め、鹿狩りなどをしてしていると、そのことを鬼神は聞きつけ、維茂の命を取ろうと女に化け、幕打ち廻し、屏風を立て、酒宴の様子で待ちかまえる。さそわれて維茂は、酒を飲み前後も知らず寝ているところを、正体を現した鬼神どもが維茂の命を取ろうとするのを、八幡（やわた）八幡宮はよく御存知あって、この末社に、危機を告げ知らせよとのこと。ただち急いで参いろうと思う。」

附 「紅葉狩」以後、鬼の化けた女が紅葉狩の酒宴に武将を誘うという筋書きは世に広まり、多くの作品でさまざまに變形し、別の筋書きの一部となったり、また維茂の名を変えたり、多くは戸隠山でのことであるが時に場所も変えたりして扱われる。以下にその例をあげておく。なお、謡曲の章句には世に害を為す鬼

神を退治するために維茂が山に入ったとはされていないが、アドアイが鬼神退治と為に山に入ったと語るために、鬼神退治の為に維茂が戸隠山に入ることにはほとんどがなっている。

『戸隠山絵巻（とかくし山）』江戸初期か？ 戸隠神

社久山家蔵。『戸隠山絵巻』考」『伝承文学

研究』第34号1987年）に翻刻あり。

主人公の名は維茂ではなく「きひの大臣」となっている。

『いぶき山』古浄瑠璃。十七世紀後半か？ 「金平

浄瑠璃正本集」第3所収。

戸隠山ではなく伊吹山での頼光の酒呑童子退治の一部に、鬼の化けた女が花見の酒宴に誘うという趣向として採り入れられる。

『仁勢物語』(仮名草子)。寛永年間(一六二四〜一

六四四年)刊。「日本古典文学大系」90 仮名草子集」所収。

「伊勢物語」のもじりであるので維茂も鬼も

歌を詠む。

『紅葉狩（平のこれもち）』（浄瑠璃）。明暦四年（一六五八年）。早稲田大学演劇博物館蔵。

維茂将軍が七十五騎の部下を連れて念願の戸隠山への紅葉狩に出かけ、そこで女に化けた鬼たちとの大宴会と鬼神退治。この鬼神の頭の「ばさら王」はかって維茂に討たれた「もろかた」の執心と設定されている。話はその後、もう一人の将軍・豊浦清文の策略と維茂との争いに展開する。

『新撰紅葉狩』（浄瑠璃）。宝永五年（一七〇八年）。土佐少掾橘正勝。『土佐浄瑠璃正本集』第2所収。

平の維茂、藤原の行春、橘の遠平の三者による戸隠山での鬼神退治とその後の維茂と遠平の争い。戸隠山での紅葉狩の場面はなく、立田山で、遠平の変じた鬼神と維茂との紅葉狩の酒宴の場面がある。

『もみじ梔狩劍本地』(浄瑠璃)。正徳四年(一七一四年)初演？ 近松門左衛門作。「近松全集 第八巻」所収。

維茂を慕う二人の女や敵役の策略も絡んだ筋書きだが、最後の場面は『紅葉狩』の趣向。

『戸隠山太平御劔』(浄瑠璃)。『もみじ梔狩劍本地』の改作。

『はなもみじ花楓劍本地』(浮世草子)寛延二年(一七四九年)、多田南嶺作？ 「八文字屋本全集 第19巻」所収。

主人公は市川江見右衛門。戸隠山の鬼神の子孫(実は強盗で、江見右衛門の父)が登場。

『平維茂凱陣紅葉』(浄瑠璃)宝暦六年(一七五六)年)。

竹田出雲他。新日本古典籍総合データベースで検索すれば広島文教女大蔵の画像がある。平維茂と太宰の大弐阿曇が、戸隠山での二人としての鬼神退治から凱陣した後のこととして話は始まる。中心は悪役の安曇を討つ維茂の活躍。

『傾城水滸伝』（合巻） 曲亭馬琴著。一八二五年（一

八三二年刊。『傾城水滸伝』を見よ。

『紅葉狩吾婦錦絵』（合巻）。墨川亭雪麿作。文政十年

（一八二七年）。新日本古典籍総合データベース

ースで検索すれば国文研蔵の画像がある。

戸隠山で維茂が紅葉狩の宴を開いて女盗賊

をおびき出す趣向。

なお、井沢蟠竜著『広益俗説弁』（正徳五年・一七一

五年）も参照のこと。